

Tokoro Museum Omishima



い、自らが理想とする美術館建設を思い立った。建設に適した土地を探すために、全国各地を探し歩いた彼が最後に辿り着いたのが、大三島だったのだ。この場所を選んだ理由は、高台からの景色を気に入ったということだそうだが、大三島を初めて訪れたよそ者の所氏に対して、元氣にあいさつしてくれた島のこどもたちの明るい笑顔に惹かれたからだとも言われている。

いずれにしても、美術館建設地は決まった。後は、どんな建物を造り、どんな作品をコレクションするか。

設計を担当したのは、建築家・山本英明と彼が率いるDEN住宅研究所。斜面に沿って2枚のコンクリートの壁を立て、その上に屋根を載せたシンプルな建築だ。長さ40mの壁と壁の間隔は6m。『キッシング・ドア』が設置されたエントランスと最下層部のテラスとの高低差が6mあるため、建物を横から見ると、やき

ものを焼成する“登り窯”のようでもある。2枚のコンクリートの上に架けられた屋根を覆うのは、白いテント地。そして、それを支える江戸小紋の菱垣をイメージした骨格には、間伐材の丸太が使われている。

建物内部には、道路側から『キッシング・ドア』を通って入ることになるが、地形に合わせて細かく刻まれた6層からなる展示空間を移動する時には、一度外へ出なければいけない。建物横にある外階段を利用するのだ。室内照明はごく僅かにあるが、特に暗い日を除けば点けられることはほとんどない。展示室を移動する際に通る開口部や屋根のテント地を通して入る自然光が、厳かにコレクションを照らす。それはまるで、寺社や教会で神仏像を眺めているかのような体験だ。建物の最下層部にある広いオープンテラスは海に向かって開けており、展示室とは全く異なる印象を抱くだろう。



建物にいくつも設けられた開口部や屋根のテント地を通して、展示室にやさしい自然光が降り注ぐ。



登り窯を思わせる建屋が、斜面の上から下へと伸びる。右側に見えるのは、大三島のあちらこちらにあるみかん畑。

現代
アート

ところミュージアム大三島

大 三島のほぼ西南端、大崎上島が浮かぶ瀬戸内海を望む高台に、コンクリートで造られた、一風変わった建物が立っている。入口の扉には、男女一組の顔。この施設がオープンしている時は、左右に離れているが、クローズするとまるでキスをしているかのように密着する（写真上）。実は、これも立派な美術作品なのだ。メキシコ人現代美術家ノエ・カッツが作った『キッシング・ドア』。そして建物は、すでに紹介した今治市立大三島美術館の別館として、2004（平成16）年に開館したところミュージアム大三島である。

現在は今治市が運営する公共文化施設のひとつとなっているが、元々は所敦夫氏（2015年没）という一人の実業家が建てた、いわば彼の“理想のミュージアム”だった。事業の成功で財を成した所氏は、それを社会に還元しようと、これまでにな